

史林

第貳卷 第四號

大正六年十月一日發行

(通卷第八號)

研 究

釋迦と塞と赭羯と乳軍

文學士 藤 田 豊 八

漢書の塞種が Herodotus, Strabo, Ctesias 等の 者也、亦語有輕重耳」といひ、「塞西域國名、即 Sacae であるといふ」とは大体に於て學者の一致 佛經所謂釋種者、塞釋聲相近、本一姓」といへる するところであつて、殆ど定説といつてよい。し は、何等の依據を示さざるに於て、なほ證明を待 かも塞即ち Sacae が釋迦 Sakya と同一であるや つべきものである。さきに明治二十八年井上博士 否やに至つては随分異論があり、從來同一である と故那珂博士との間に釋迦種南下説につきて論争 と主張する學者の論據も決して充實したものでな せしや、那珂博士は「漢書の顏註は左傳の杜註と かつた。顏師古が漢書塞種に註して「即所謂釋種 並びて有名なるものなれど、惜い哉西域の註は他

處の如く精確ならず、唐初の人西域の地理には未だ明かならざりし故に、疎漏杜撰の説頗る多し、されば此の塞釋同種の註も、別に根據とてはなく單に音の似たるより、然るべしと想像して云へるには非じとも言ひ難し、然れども塞種の位置動作は漢書の本文に明記して、ストラボン氏のサーカイ種の有様に善く合へる所あれば、塞種のサーカイ種なることは殆ど疑なし。故に釋迦種とサーカイ種と同一なりといふ確據だに、他の方角より擧がりたらんには、この顔註も一方の應援を爲すだけの價はあるべし、されども他の確證の擧がらざる間は、孤立してその説を保持する程の力ありとは思はれず」といはれて居る（史學雜誌第六編第十一號）こは釋迦種南下説に對する疑問三個條の一個條であるが、實際顏師古が塞釋同種の註は博士のいはれたるが如く單に音の相似たるより想像

せしに過ぎないだらうし、元和姓纂に「塞姓天竺胡人之釋後」とあるも師古の註などに本づいたものとも解せられやうのしかも予輩は塞が已に Sacae である以上、確據とまではいへぬまでも、やゝ信するに足るべき所傳に本づき、そが釋迦と同一であることの強ち證明せられぬでもないやうに想ふのである。

さて釋迦種族分散の事情は種々の佛典に見わて居て、詳細に亘りては固より差異の點も少なくはないが、釋迦佛末年にこの事件のあつたことは否定せられまいと思ふ、先づ玄奘の所傳に據ると左の如くである。

誅釋西南有_二四小窰堵婆_一、四釋種拒_二軍處_一、初勝軍王嗣_レ位也、求_二婚釋種_一、釋種鄙_二其非類_一、謬以_二家人之女_一、重禮娉焉、勝軍王立爲_二正后_一、其產_二子男_一、是爲_二厥盧釋迦王_一、厥盧釋迦欲_レ就_二舅

氏、請^レ益受^レ業、至^ニ此城南、見^ニ新講堂、即^レ中憩駕、諸釋聞之、遂而嘗曰、卑賤婢子、敢居^ニ此室、此室諸釋建也、擬^ニ佛居^ニ焉、毗盧釋迦嗣^レ位之後、追復^ニ先辱、便興^ニ甲兵、至此^レ屯^レ軍、

釋種四人、躬耕^ニ畝、便即抗拒、兵寇退散、已而入^レ城、族人以爲、奉^ニ輪王之祚胤、爲^ニ法

王之宗子、敢行^ニ凶暴、安忍^ニ殺害、汗^ニ辱宗門、絶^ニ親遠放、四人被^レ逐、北趣^ニ雪山、一爲^ニ鳥

仗那國王、一爲^ニ梵衍那國王、一爲^ニ呬摩咀羅國

王、一爲^ニ商彌國王、奕世傳^レ業、苗裔不^レ絶、(西域卷六劫比羅伐拏堵國條)

勝軍王は Prasenajit 毗盧釋迦は Virūdhaka で、後者は Viṇḍabha とも Vaidurya ともいひ、均

しくこの事件を傳へたる琉璃王經の(璧)琉璃は Vaidurya の音譯である。鳥伏那は Udyana 梵衍

那は Baman であつて共に雪山の麓にあつた國で

ある たゞ玄奘は西域記に於てこの二國の條下にはその王の釋種なることを明記してはないが、同卷十二呬摩咀羅國條下に於ては

其先強國、王釋種也、葱嶺之西、多見^ニ臣伏、境鄰^ニ突厥、遂染^ニ其俗、又爲^ニ侵掠、自守^ニ其境、

故此國人、流^ニ離異域、數十堅城、各別立^レ主、穹廬毳帳、遷徙往來

といつて居り、同上商彌國條下には 其王釋種也、崇^ニ重佛法、國人從^レ化莫^レ不^ニ淳

信、

といつて居る。呬摩咀羅につきては西域記卷三迦濕彌羅條下にその王が迦濕彌羅王を殺しその國を

平げたことを紀し、註して「唐言雪山下」といへば、通例之を Himālaya と還原するに異論はない

やうである。況んや Alberuni が印度北の諸國を擧げたる中に Hemitāli といふ國名あるに於てを

やである (Sachin 氏英譯 India 第一卷三百〇三頁) 西域記にはこの國の所在を訖栗瑟摩 (Kishm, Kashm) の東三百餘里、鉢鐸創那 Bada'shan の西二百餘里に置いて居る。たゞ予輩はこの國につきて塞釋同族の何等の手懸をも得た譯ではない。予輩の目指すところは實に商彌國に在るのである。

商彌國の所在は大体に於て Kunar 河の流域と視てよからう。その都城が今の Mastuz であつたか、今の Chitral であつたか、はたその他であつたかは、唐書に傳ふる阿唎廳帥多 (Aswajit?) の解釋がつくまで保留するがよからうと思ふ。况んやこの國が白鳥博士の主張せらるゝが如く、漢代の雙靡、魏代の折薛莫孫であるや否やに至つては予輩は頗るその賛否に迷はざるを得ない。たゞこの商彌が宋雲等及び魏書(正しくは北史)の除彌な

ることは略ぼ疑ふの餘地なく Stein 氏が之を別地とするは理由なき言と謂はざるを得ない。而してこの國については慧超傳に

又從_レ烏長國、東北入_レ山十五日程、至_レ拘衛國、彼自云_ニ奢摩揭羅闍國_一此王亦敬_ニ信三寶_一、有_レ寺有_レ僧、衣著言音、與_ニ烏長國_一相似云云

と見えて居り、烏長は西域記の烏仗那なること言ふまでなく、東北の西北の誤なることは、さきに予輩がこの傳の箋釋に於て辯じた通りである。拘衛は悟空の拘緯、唐書の俱位と、即ち後者に「俱位或曰商彌」といへるものが是である。慧超傳に據れば拘衛即ち拘緯・俱位は外國人の此國を稱した名で、自らは奢摩揭羅闍といつたといふ。揭羅闍はこの傳箋釋に於て既に説いた如く、また曷羅闍も書き Roga の對音である。従つて奢摩揭羅闍とは摩奢王の義で、予輩は除彌若くは商彌は奢摩

と同音を譯するに異字を以てしたに過ぎないと信するのである。いふまでもないが除は式車、詩車、若くば詩遮の切で唐韻集韻韻會正韻並に音奢シヤであり、彌は音ミではあるが、i韻を以て a 韻を譯するは殆ど通例といつてよい程である。従つて予輩は除彌商彌奢摩は Samana 若くば Sama と還原すべきものであつて、從來の印度學者の如く Sambhi などすべきではないと信するのである。

たい予輩がかゝる言をなすは、固より單に音韻の上からのみいふのではない。なほ他に確實なる證左があるからである。西域記にはこの國の王を釋種だといつて居る。また釋種分散の時、自族の爲めに一旦毘盧釋迦王の兵を退げ、後ち自族に依りて追放せられた勇者を四人といつて居るが、増一阿含經(卷第二六)に據れば奢摩(或は舍摩に作る)なるもの一人として居り、Rockhill 氏の西藏

所傳を基礎とせる釋迦傳(一一七頁)には之れを Sunka に作つて居る。除彌商彌の王家が釋種分散の時の釋種に血統を引き、そが自ら奢摩王と稱し、分散の時の釋種若くばその一人が Sunka 若くば Samana と呼ばれたとすると、予輩が除彌若くば商彌を Samana 即ち Sama と還原するに殆ど何人も異論はなからうと思ふ。そして Satjare 氏英譯 Alburni の India 第一冊三〇三頁に印度北方の國名を擧げて Syamaka とある多分是であらうと思ふのである。

此國の名が支那の史籍に見わたのは北魏時代を始とする(雙靡は疑問として)さきに已にいへるが如く宋雲行紀に除彌として記され魏書(正しくは北史)の西域傳はこれに依つて居るが魏書(卷九)の帝紀肅宗紀には明に舍摩として見わたる。

即ち神龜元年夏四月に「舍摩國遣使朝獻」とあるのがそれである。なほ是よりさき、世宗正始四年夏六月遣使朝獻せる社蘭達那羅・舍彌・比羅直諸國の舍彌(同上卷八、永平四年秋八月遣使朝獻せる嚧噠・朱居槃・波羅・莫伽陀・移婆僕羅・俱薩羅・舍彌・羅樂陀等諸國の舍彌、同上も殆ど舍摩と同じく除彌をいふのであらう。このうち社蘭達那羅の那は衍字で Jindhara であらうし、比羅直は西城記の佛栗特國であらう、此等印度北方の諸國と共に遣使したとすると舍彌の除彌なること想像に餘ある。また嚧噠は Yeha, ephthab で朱居槃は Kangalik であり、波羅は明でないが、莫伽陀は Magadha であり、移婆僕羅は明でないが、俱薩羅は Koala であり、羅樂陀は Laja (Lades) であるとする。舍彌を除彌と視て何等の不都合もないやうである。なほ唐書西域傳に舍摩國を不明の

の中に入れてあるが、それは此名が除彌・商彌の異譯であるを知らなかつたに因ること言を須たぬ。以上略説した所で今の Sami 河流域地方に釋種を王とした國があり、その王が Sama 若くば Sami と稱し、それが魏から唐代にかけて舍彌・舍彌・除彌・商彌・奢摩など呼ばれたといふことが知れる。そして所謂 Sami 若くば Sam は釋種分散の時の勇者(若くば四勇者中の一人)の名で、それが此等地方で釋種王家の名となり、遂に國名のやうになつたといふことが知らるゝのである。特に予輩は慧超傳に「彼自云奢摩羯羅闍國」とあるに多大の興味を感ぜざるを得ない。奢摩・羯羅闍即ち Sama Sami 若くば Sami 王家とは何であるか釋種の王家がかく自稱せりといふは何を意味するか。Sam (Sam) は Zawulistan 及び Seistan (Sakusam) の王家の名で、紀元十二世紀の中葉から一千

二百十五年まで Ghour (Ghoustan) の王家が自稱したところではなからか。A. Villela (1273-1331) の地理書に Moshtarik を引く、此國の首城 Firouz-kouh (Firouzkhoh) を説き、「これ Sam 王朝なる Ghour 家諸王の居城である」といへるものがある。『Reinard Guyard 共譯第二卷二〇二頁』。又た Yakut (1178-1229) の書の抄譯に過ぎないところはある。Ménard の波斯地理歴史字典四〇八頁に Firouzkhoh 城を説き、「これから Sam 王家は出たといつて居る。この王朝の歴史につきては、西紀一千八百四十三年の J. A. 紙に D. Ghémery の佛譯したる Mirkhond の Ghour 王朝史が載つて居る。たゞ予輩はこれに Gour 王朝の祖先が眞に Sama (Sam) から出たか否やを問はんとするものでない。單に彼等の自稱せし Sama 王家は波斯古史のそれで拘衛の奢摩褐羅閣の奢摩も均しく

それであるといふを知らば足るのであつて、この點に對しては畧ぼ疑がなからうと思ふ。何となれば此等印度西北地方に於て別に amn (Sam) 王朝、若くは之に類似の名の王朝はなかつたからである。尤も Sam と Sam とは音に多少の相違はあるやうだが、Sama が Rockhill 氏の佛傳には Samki となり、Sam も亦た Gouineau 氏等は am (Cana) と綴つて居るから視ればその差は極めて輕微なものであること言を須たぬ。さて波斯古史に於て、Sam 王家は悠久なる起原を有つて居たやうである。後世の著作に説くところは姑く之を措くとするも、Zendu-Avesta にはこの一族に巳に Cana といふ族名を冠して居り、それが遂に時を経るに従ひて Nez の父にして Rousam の祖の特有の名となつたといふ。又た地域相接する印度人もこの一族の Jinita を知り、

Gama Keregagpa 若くは Kershasap 即ち Kaigayva につきても、Vedas には見ぬが、文法家 Panini 及びその詩篇には見えて居る (Gobineau 氏の波斯史第一冊自二八六頁至二八七頁)。そしてこの一族の人で、波斯史上最も有名なるは、いふまでもなく Koustem で、波斯人は、この王を理想的の「ヒーロー」とし、猶ほ印度人の Rama に對し、佛人の Roland に對し、西班牙人の Cid に對し、獨逸人の Siegfried に對すると同様であるといふ。此王の武勳につきては Ferdous y の Shah-Naméh なる史詩に詳しいが、こは或は信じ難いとするも、第五世紀の Armenir 史家の Moï de Khoréne の證據があり、Jabari & Massoudy & 並に之を傳へて居る (佛譯 Aboulfedâ' 地理書 Reï-nar d'序文) として Koustem の子に (Furamorz) Fer-Amorz といふのがある。例の有名なる Cyrus

王が Zawul 地方を攻伐したるも、此地の am 王族は一旦之に抵抗し、Fera norz は爲めに生擒せられ、後ち赦されて之に従ひ、その父 Roustem 等と共に Cyrus の諸國經營に大功を建てたと傳へられて居る。この事は Ferdousy の Shah-Naméh に見ゆるのみでなく、西紀前約四百年頃の希臘史家 Ktesis の傳ふるところ、後者は Fer-Amorz を Amores に作り、之を明に Sacae の王子として居る。Shah-Naméh にはなほある東方民族の Kar 若くは Khar-ah 侵入、この東方民族驅逐に關する Roustem の建策、Fer-Amorz のこの戦争に於ける戰績を傳へて居る。Khar は Idore de Ch rav の Gari 即ち後世の Gur ならんかといはるゝが明瞭でない。たゞこの事は Cyasas も之を傳へ、Sacae の上方地方に占據したる東方民族なる Derikkes に對しての事として居

る。この戦に於て波斯人は一旦利を失ひ、Cyrusは爲に傷を被つたが、Amorgesの率ゆるSacae人に助けられて再び勢を得、遂に之を征服し、しかもCyrusはこの傷の爲めに第一戦後第三日目に死せりといふ。(Muller氏Circias四五頁至四七頁Rawlinson氏古代東方五大帝國第三冊三八七頁)Cyrusの死についでこの所傳はHerodotusのそれとも、又たShah-Naméh等のそれとも合はぬから固より信ずるには足りなからうが、そのAmogisは、即ちShah-NaméhのFer-Amurzじあつて、これをSacaeの王子とするに於て、頗る注意するに足るべきものがあると思ふ、實際この一族は波斯の所傳に於てもSeysan即ちSakas an)のCam族と稱せられて居たのである。そしてなほ波斯の所傳に依ると、Cyrusの下にPeramurzが「スキタイ」人をZawojより驅逐してから、この王國はその境域を推廣してIndus

の彼岸に至り、且つ之を統一し、Kashmirに至るまでCam王家の統治の下に、波斯の主權を認めたと傳へられて居る。かく東西の所傳を比較すると、拘衛なる釋種の王家は自らSama, am (Sam)と稱し、波斯の古代よりSeystan (Sacaстана)の王家、即ちSacae人の王家をSama, Sam (Cam)と稱したるとすると、釋種は漢書の所謂塞即ちSacaeであるといふに不可はなうでないか。固よりHerodotusのいつたやうに、波斯人はあらゆる「スキタイ」をScaeと呼んだといへ、またStraboのいつたやうにSacaeは「スキタイ」の普通名稱として用ひられたといへ、その始め特種のSacaeといふ種族のあつたことは、多くの學者の承認するところである。そしてこのSacae (Sakan)が

Herodotus に依れば Cyrus の時には Cassa 人の Gamlaria の次 Sattagydia の前に記され、Persopolis のされど Sattagydia, Arachosia, India の并に第十五 Satrapy を成し(第三卷九三章)、Xerxes の希臘征伐には Bactria 人と同隊に編せられて居る。たゞ後者の Sacae はその實 Amargia 人であるといふ(第七卷六四章)、コンに所謂 Caspi につきては種々の説があり、或は Kasii であるといひ、或は Casperi (Cashmir) であるといひ、一定はして居ないが、Caspia 海の環近ではなく、そが印度の北邊の地方なるべきは學者の畧は一致するところである (Rawinson 氏注 Herodotus 第四冊二〇三、四頁)。(特に我が白鳥博士の如き、最も明快に Caspi 即 Cissa 説をなし、之を葱嶺山中の Jaskurgan であるといつて居る。(東洋學報第三卷第二號)。(又た所謂 Amyrta が今の何地なるやを確定するは容易でないが、Balistan に於ける Darius の碑文でも Sacia 或 Bactria, Sogdiana, Sacae の故土が Seystan 附近にあつたのではな

らうかとの疑がないでない。換言すれば紀元前第七五六世紀に於ける Sacie の所在は *Var ngia*, *Ara-chosia* の附近ではなかつたらうかと想はれぬでもないのである。特に *Naksh-i-Ru tim* 碑の *Saka* は *Saka-Himavarya Saka-Tijrahula* の二種で前者は *Iero tolus* の *Am, rgi* (*Amorgioj*) であり、それが *Cesias* の *Amorgés*, *Furdous* の *Fermozás* と關係があらうと想へるに於てをやるである。然るに *Ai xa der* 大王後の希臘人は概ね *Sacie* を葱嶺以北 *Xartes* の彼岸に置いて居る。 *Erastosthenes* 然り、 *Srabo* 然りである、また紀元後に於ける *Perigees* 亦た然りであつて、 *Ptolemy* の如き、之を *So, dina* の東 *Enaos* 山脈の西 *Komada* の高原地方に當てゝ居る。かゝればこの民族は印度の西北地方より或る事情に因り、葱嶺を越へて *Yax rtes* の彼岸にまで蔓延若

くは轉移したとも視られぬでもない。そしてそがまた月氏の壓迫に因り、印度の西北地方に復歸したとも視られ得るのである。たゞ予輩は *Sacie* の故土及びそが *Arya* 種なりや *Turk* 種なりや等の問題に關しては、特に研究したこともないから、こゝに何等の斷案をも下すことは出来ないが、兎も角白鳥博士の如き、この民族の故土を天山山麓とし、且つ之を「*ミヤ* 種なりとする學者と雖も、その印度に進出したるを悠遠なる古代に在りとして居る。要するに紀元前五六世紀に印度西北地方に *Sacie* なる民族の居たといふことは一概に排斥することも出来ないやうである。

西域記その他の佛典は釋種の分散を佛在世中のこととして居る。(即ち五六世紀の事を視てよいのである) 固よりかゝる傳説を傳説そのまゝに信ずるは愚の極である。たゞ釋種の分散して印度西北

諸國に君臨したといふことに多少の意味がなからうか。即ち釋を *Sacae* との間種族的連絡のあるのを暗示するものではなからうか。況んやさきに論證したるが如く、釋種の王家は塞即ち *Sacae* (*Sica*) の王家と均しく *Sam* (*Sam*) と稱せしむや。そして前者の *Sam* が後者の *Sam* となるを均しく、前者の *Sakya* が後者の *Saka* となるをも注意すべきことと想ふ。

附言 *Seystan* に關聯してこの一言するの要がある。それは漢書の烏弋山離についてである。予輩はさきに慧超傳箋釋に於て、姑らく舊説に従ひ、その都城を今の *Kandahar* とし、それを *Alexandria* の轉訛と視、烏弋山離を *Alexandria* の對音とした。しかもこれが満足すべきものではないことは、當時と雖も心附がない譯ではなかつた。近ごろ白鳥博士は「罽賓國考」(東洋學報

第七卷第一號)に於てこの説を否定し、*Kandahar* の地が「*Darius* 王の碑文に *Harvatis* と記され *Greek*, *Rome* の記録には *Archosia* 或は *Archoisus* とかけられ、その名稱は連續して *Arbia* 時代に至るまで持續せられた」とりして「想ふに烏弋山離の烏弋は *Harvatis* の *Haru*, *Aahutus* の *Ara* を譯したるものなるべし。漢語には「音なかりしが故に *ruch rahn* を音譯するに類似の發音を有する *Yok, dok*) 字を使用したるならむ。また烏弋山離の山離は *Drandiana* をいへるなるべし。この地は *Darius* 王の碑文に *Zaranka* とあり、*Greek* 人の間には *Sacanga*, *Za angiana*, *Drangiana* の諸稱にて呼ばれ、その都城を *Zarin*, *Zaring* とつひ *Iran* 語海の義なり。想ふに山離はこの *Zarin* の對音なるべし。漢書の陳湯傳に烏弋山離を山離烏弋

と記し、魏畧には單に之を烏弋とかけり。此等の例を以て觀るも烏弋山離が二國の連稱たるを察すべきか」といふ新説を出された。しかもこの新説には二個の重大なる缺點がある。その一は弋 (yuk, dok) を以て ㄣ 若くば ㄛ を譯したといふことである。如何に漢語に ㄝ 音がなるとはいへ弋よりは之に近い音を有する字がなからうか、例せば羅などはそれでなからうか。第二は烏弋山離を以て二國の連稱とすることである。烏弋山離を山離烏弋といへばとて、必ずしも二國の連稱とするを須るぬ。否な連稱ならば連稱のやうにかくべきである。また烏弋ともあればとて、これは烏弋山離の畧稱とも視られ得やう。原來希臘人が Seystan 地方を Saranga, Zangiana, Drangiana ㄎㄣㄣㄣ ㄣㄣㄣ ㄣㄣㄣ の都城を Zarin, Zaring (Sarani) ㄎㄣㄣㄣㄣ Zarah (Zirah)

湖よりいでたる名稱に相違あるまい。(Zarin, Zaring には Iran 語海の義ありといふ) をしてこの Zarah (Zirah) 湖は中世に在つても今日よりは頗る廣かつたことはアラブ人の所傳に依りて明白である。漢代に在つては更に更に大なるものであつたらう。此湖の南端に廣大なる湖床がある。この湖床から東南に第二の湖床がある。出水の時季には、Zarah (Zirah) 湖の漲水がこの湖床にも流入するといふ。この第二の湖床を Gawdi-Zarah (Gud-i-Zirah) ㄎㄣㄣㄣ 「Zar-^{カヘー}ニの窪地」といふ義である。(Strange 氏の東方大食地誌三三八頁注に Sykes 氏の Persia といふ書を引きて説けるところを見よ)。想ふにこの附近の沙地は漢代に在つては所謂 Gawdi-Zarah (Gud-i-Zirah) であつたらう。予輩は烏弋山離は ㄣ Gawdi-Zarah (Gud-i-Zirah) の音

譯であらうを想ふ。即ち鳥弋は Gawd (Gaul) の對音で山離は Zah (Zirah) の對音である。また Gawd-i-Zarah (Gaul-i-Zirah) は Zarah-Gawd (Zirah-Gaul) にへやうし、またいはれたであらう。これが即ち山離鳥弋の對音である。鳥弋は固より省稱である。魏客のみでなく漢書の鳥弋山離傳に已に鳥弋といふ省稱を用ひて居る。かく視ると漢人も希臘人と均しく湖水に因んだ名を以て此國を呼んだこととなるのである。また漢書にはこの地を記して莽平といひ、鳥孫國にも同一の語を用ひて居る。湖邊の平地を形容した文學と見ゆる。後漢書には德若國傳に「歷罽賓六十餘日行、至鳥弋山離、地方數千里、時改名排持」といつて居る。この排持もさきに予輩は舊說に従つて Parthia とした。これ亦た當時満足したもので

はなかつた。Hermond 川はまた Zah (Zirah) 川即ち Ab-i-Zarah (Zirah) ともいはれた。さうぢでもなく、こはこの地方を貫流して Zarah (Zirah) 湖に注ぐ最大なる川である。排持は Ab-i-Zarah (Zirah) の音譯ではなからうか。

唐書西域謝國條に「謝國居吐火羅西南、本曰漕矩咄、或曰漕矩、顯慶時、謂訶達羅支、武后改今號……後遂臣罽賓」と見ゆ、罽賓傳云、顯慶三年、以其地爲脩鮮都督府、神龍初、拜其王脩鮮等十一州諸軍事、脩鮮都督、開元七年、遣使獻天文及秘方奇藥、天子冊其王爲葛邏達支持勒」と見ゆて居る。たゞ冊府元龜九六外臣部繼襲脩には「西域罽賓國、開元七年、冊其王爲葛邏達支持勒」といひ、同四九六外臣部封冊第二には「開元八年九月、遣使冊葛邏羅支

特勅「爲^ニ罽賓王^ト」といひ、均しく罽賓の王にして繼襲部には葛邏達支となり、封冊部には葛達羅支となつて居るのを見ると、もとそれ同一の國名で孰れかその一を誤とせねばならぬ。そしてそが謝颯即ち Zabulistan であるとする。畧は波斯人の Haragaiti 希臘人の Arachosia、Arachotus に相當するから、予輩はさきに慧超傳箋釋に於て、葛達羅支(訶達羅支)を葛邏達支の誤と視、之を Arachotus の省譯としたが固よりその間に多少の疑がないでもなかつた。ところが近頃白鳥博士は罽賓國考に於て唐書の訶達羅支は訶邏羅支、冊府元龜の葛達邏支、葛邏達支を葛邏羅支、葛邏邏支の誤寫となし、均しく之を Arabia 人の Araxidi の對音ならんといはれて居る。たゞこの説は Chuanes 氏が訶達羅支を達羅訶支の倒置と視て、之を Araxidi

Araxidi の音譯ならんといふ説きたると均しく、原文字に何等特由なき更改を加へたるにも拘らず、なほ音聲に於て緊合するものといひ難い。今にして考ふれば予輩がさきに葛達羅支(訶達羅支)を葛邏達支(訶邏達支)の誤と視たのは、その實誤であつて冊府元龜の繼襲部に葛邏達支とあるものこそ、却て葛達羅支の語なれと思ふのである。そしてこは Arachotus、若くは Araxidi の音譯ではなく、その南方に接續する地方の古名 Gethosia (Carius i. Cadrus) の對音であらうと思ふのである。いふまでもなく、漕矩咤 Jugude (Walters) は西域記に依れば鶴悉那 Ghanza を中心とした地方である。そしてこの書には狼揭羅國 Lankala の西北に路次附見として波刺斯國 Persia を擧げて居るが、漕矩咤の西南に何國があるとも

いつてない。その後入印した唐僧も皆な同様である。唐人の陸上よりする實際の地理的智識はこれより西南に出でなかつたのである。言を換へていへば、彼等はこの地方を以て陸上より達し得べき西南の極邊と考へたのである。その證據には唐書地理志に「條支都督府以三河達羅支國伏實懸額城一置」と見ゆそしてこの書の西域傳には、上に引ける如く、漕矩咄を顯慶時訶達羅支と謂つたと傳へて居る。條支とは漢代に於て罽賓烏弋山離を過ぎ、西南行して達し得べき西海の濱ではなにか。この都督府を訶達羅支に置いたといへば(たゞ名の上に過ぎないが)、唐人が所謂訶達羅支を如何に考へたかは想像し得べきである。従つてこの都督府の領州には西海州といふのもあり、鎮西州といふのもある。想ふに唐人の地理的智識では漕矩咄を以てこの方面に於ける西南

の邊極と信じ居たるに、偶々在留の景教僧侶等より、西南極邊の地名の *Geonori* なるを聞き、乃ち漕矩咄を訶達羅支としたのか、それとも漕矩咄と訶達羅支とは、もと別々に傳はつて居たのを、唐書編纂の史官の地理的智識の缺陷から、之を同處としたのか、孰れがその一に居るであらうと想ふ。ところが武后の時罽賓國からの朝貢があり、謝旼即ち壯護羅薩他那 *Zawulistan* の名も傳はり、此等地方の狀況もやゝ判つたものと見ゆ、唐書にはその四至を説いて、「東距罽賓、東北帆延、皆四百里、南波羅門、西波斯、北護時健」といつて居るが、西と南はなほ漠然と波斯波羅門といひ、且つさきに聞き覺わな漢代の條支とする訶達羅支の名は、國光の遠被を自負する心から開元中には罽賓の特勳にすら冠せしめたものと見ゆる。尤も是は當時の罽賓即ち

迦畢施 *Kapis* は謝颯を併せ、その勢力は殆ど訶達羅支即ち *Gedrosia* にも及んだやうであるからにも因らうが、しかもこの名が唐人に頗る重視せられたことは拒まれぬ。

いふまでもなく *Gedrosia* は *Arabia* 人の *Melanin* である。この名は顯慶中にはなほ實用せられて居たらう。たとへ然らずとするも唐代の景教僧侶はこの名を以てこの地方を呼んだらう。そして *Gedrosia* が *Cadussi*, *Cadrusi* と結合せらるべきものたるは、*H. Rawlinson* 氏がその *Vocabulary* に於て既に根據を示して居るといふ (*Rawlinson* 氏註 *Herodotus* 第四冊二一四頁) 訶達羅支特に葛達羅支は *Cadrusi* の對音として最も適當なる文字でないか、たゞ予輩は所謂 *Vocabulary* に寓目することの出来ないのを遺憾とするが、たとへ *Gedrosia* は *Cadrusi* で

ないとするも訶達羅、特に葛達羅支を以て *Cadrusi* の對音としてさまで不都合はないやうである。

なほこゝに書き加へて置きたきことは謝颯なる國名につきてある。颯の字符を日と視たのは、全く予輩が習見の字形に拘んで段注説文さへ檢索せざりし疏漏に坐し、深く白鳥博士の垂教を辱せしを謝するが謝颯は *Zavul* (*Zavul*) の對音として遺憾なきものであらうか、颯は *vul* の對音として實に遺憾はない。従つて予輩も白鳥博士の垂教を辱して後、一旦は謝颯は確に *Zavul* の對音であらうと信じた。ところが頃日偶々北魏書を檢索するに當時朝貢諸國中に遮逸なる國あるを見るに及びて、*Seystom* (*Sjeistan*) なる國名は當時既に支那に知られたのはなからうといふ疑が起つた。従つて謝颯は矢

張 Sey, Sewi の對音ではなからうかといふ疑が起つた。軋は wul の對音とすることも出来るが、y, wi の對音とすることも出来るではない。時に逸 it, yit, jit, te i, yi, ji の對音とすることは出来るが到底 wul の對音とすることは出来ぬ。尤も遮逸が Seystan を謂ふのかどうかは問題であるが、謝軋の謝は na よりも Sa 若くは Se に近うことは争へまい。予輩は敢て非を遂ぐるといふのではないが、現在では謝軋を遮逸と同一と視、之が Zawul の對音であるか、 Sey, Sewi の對音であるかに迷つて居り、孰れかといへば後者に傾いて居る。たゞさきにもいつた如く謝軋の軋が軋ならんには、そが Zawul (Zabul) の對音たるべきことを固より疑はなご。

西域記卷一颯秣建國 Samaskand の條に「其王

豪勇、隣國承命、兵馬強盛、多是赭羯、赭羯之人、其性勇烈、視死如歸、戰無前敵」といふのがある。この赭羯につきては、唐書西域傳安國 Bokhara の條に「募勇健者爲柘羯、柘羯者猶中國言戰士也」と見えて居る。予輩の見るところを以てすれば、從來諸學者がこの赭羯若くは柘羯に下せる解釋は何れも満足のものでない。Walters 氏がその西域記の註譯第一冊九四頁に於て之を Chalak と視たるは論外とするも、Maquart 氏が Chavannes 氏の問に答へて、之れを波斯語 tehakar の對音とし、原來は僕隸の義なれど Soghdiana にては戰士(衛士)を謂ふ名に轉せしならんといへるも、想像に過ぎないのである(西突厥史料三二三頁)。また我が白鳥博士が東洋學報第一卷第三號「西域史上の新研究」に於て之を Turk 語にて解し、「Uigur 語の Sugu, Kusnezk 語の Sag な

ごとに近き原語の對音にて戰爭鬪争の義より一轉して此處には戰士を呼ぶ名となりしものならん」といひ、「Bokhara, Samarkand 邊の士民は、その頃に於ても無論 Iran 種なれど、其君主は勇悍なる Turk 人なりしが故に、戰士はその國語によりて赭羯即ち (Sagas) Sugus と稱せしなるべし」といへど如何であらう。西域記颯秣建國條には「王及百姓不信佛法、以事火爲道」と見え、又た唐書西域傳康國(薩末嚧)條に「其王屈木支娶西突厥女、遂臣突厥」と見え、突厥に臣たりしは事實であるが、その王が Turk 人であるか否かは明でない。否な寧ろ Iran 人ではなからうかと想はるのである。安國の王も亦た同様である。尤も此等諸國の王が昭武を氏とし、月氏の子孫のやうに傳へて居るが、こは固より信するに足るまい。又たよし此等地方の王が「Iran 人であつたとするも、

一般軍士の義なる Sugas (Sagas) を以て、一種の軍士なる赭羯、拓羯に當るは如何であらう。この赭羯拓羯は函書の傳ふところ共に勇猛なる軍士の特稱である。従つて予輩は之を Sacae (Saka) 若くはその轉訛でなからうかと想ふのである。茲にもいつた如く Darius の Naksh-i-Rustam 碑文には Saka Humavarga, Saka Tigra-kunda とする二種の Saka を擧げて居るが、前者は Herodotus の Amyrgia の Saka と Rawlinson 氏は、自ら Humavarga 即ち Anyrji と稱する Saka は波斯軍の最良且つ最善のある部隊を供給したといつて居る (Herodotus 註第四冊二〇二頁及び古代東方五大帝國第三冊一〇七頁 若し夫れ Humavarga, Amrgi (Amorgioi) は Ctesias の Amorgés, Perdous-y の Fctam rzes と關係があるとする Sacae (Saka) が波斯の軍隊に最良且

つ最勇の部隊を供給したのは、Gyrus, Darius の (Saka) は、その始は別として、東北山地の外族昔から既に然りてあつて、Alexander 大王東伐の時も、この種族は波斯の爲めに勇敢に戦つたと傳へられて居る。そしてこの Saka は遂に Sasan 王朝の時に至りて始めて消滅したといへば、唐初にその名はなほ存じたるべく、舊の如く Sostiana 地方の Iran 人の國家に最良且つ最勇の軍士を供給したものと見ゆる。處は差ふが唐書西域傳謝廳 Zabulistan 條下に

國中有突厥屬吐火羅種人雜居、屬賓取_二其子弟_一持兵以禦_二大食_一

と見て居る。この書の屬賓は Kapis であるが、大食防禦の爲め Kapis 王家は波斯の舊慣の如く一種の Saka 兵を編制したものと見ゆる。かゝる習慣は大食時代に至り Mambuk となりて現はれて居るのである。固より波斯人の所謂 Sacae (Saka) の態度と略ぼ同様であつた。若し

(Saka) は、その始は別として、東北山地の外族を總稱したのであつて、必ずしも一定の種族ではなかつた。この Sacae (Saka) は Turk 族でないにしても、Turk 族の血を多分に混じた Iran 人であると思へるが、時を経るに従ひて、所謂 Sacae (Saka) は勇健なる被傭外族の軍士を意味するやうになり、Turk 族の蔓延と共に、その勇健なるものが、Sogdiana 地方の Iran 人の國家に傭兵として使用せられ、之が舊に仍りて Saka 即ち赭羯、拓羯と稱せられたものと見ゆる。大食入寇に當りて、Sogdiana 地方に防戦したのは多分この赭羯、即ち拓羯であらうが、印度北邊に於て勇敢に防戦したのは釋種の王家を戴ける俱位即ち商彌及び烏長即ち烏伏那と骨吐 Khuttai であつて、(冊府元龜卷九六七) Alexander 大王東伐に對する Sacae (Saka) の態度と略ぼ同様であつた。若し

夫れゴミテ族の言語に果して勇敢なる軍士を義とする Sogias がありとすれば、こは波斯人 Saka のから轉訛したものではあるまいか。

唐書卷一九二張巡傳には更に趣味ある一事實を傳へて居る。そは肅宗至德二年(西紀七五七)安慶緒がその下尹子琦を遣り、同羅・突厥・奚の勁兵に將とし、楊朝宗と合し、張巡等を睢陽に圍んだ時のことで、

賊覘_ニ城上兵休_一、乃弛_レ備、巡使_下南霽雲等開_レ門、徑抵_ニ子琦所_一、斬_レ將拔_上旗、有_ニ大酋_一被_レ甲引_ニ拓羯千騎_一、麾_レ幟乘_レ城招_レ巡。云云

とあるのがそれである。こゝに大酋といへば、そが漢人にあらざるは明白である。そして尹子琦の率ゐたのは同羅・突厥・奚の勁兵であつたといへば、所謂拓羯は此等から組織せられた軍隊であらう。いふまでもないことだが、當時柳城即ち今の

朝陽地方には亞細亞西方の胡人の居住するものが少なくはなかつた。姜師度が柳城を再建したときにも「追拔幽州及漁陽淄青等戶、並招輯商胡、爲立店肆云云」(舊唐書卷一八五、下新書卷一三〇)と傳へられ、この地の人と稱せらるる安祿山も、父胡母突厥と稱せられ、そが幽州に據つて叛せんとするや、分_ニ遣商胡_一詣_ニ諸道_一販鬻_ニ歲輸_一珍貨數百萬(通鑑卷二一六)といひ、或は「潜遣_ニ賈胡_一行_ニ諸道_一、歲輸_ニ財百萬_一(唐書卷二二五安祿山傳)といはれて居る。しかも予輩はこの拓羯を以て必ずしも西方亞細亞の胡人とするものではない。さきに已に説いた如く、拓羯は固より Sogae (Saka) から起つた語であらうが、時の久しき、他國に被備せらるゝ豪健なる戰士の義となつたこと、Sogai 地方に於て已に然りしが如く、東方亞細亞に於ても亦た然りであつたらうと思ふ。従つてこの

拓羯中には突厥も有り、同羅も有り、奚もあり、また雜胡もあつたであらう。ゑるにても *Sogdiani* 地方の拓羯なる語が、遙かに東方の幽營地方のある軍隊の名として用ひらるゝに至つたのは、頗る趣味あることゝいはねばなるまい。

さて所謂丸軍は契丹の創始したところであらうか。予輩は之を以て拓羯の遺制に過ぎずして、その名稱も拓羯から由來したものに外なるまいと想ふのである。この丸軍につきては、一昨年から昨年にかけて箭内羽田兩學士の間論争のあつたことは、なほ讀者の記憶に新なるところであらう。

箭内學士はこの丸字の音を邵遠平の元史類編卷一世祖太祖九年の條に「丸音冥、遼東君也、凡二十五部族」とあり、彭大雅の黑韃事略に「其軍即民之年十五以上者、有騎士而無步卒、人二三騎或六七騎、五十騎謂之一糾都由切即一隊之謂」に求め、糾を丸

の譌にして都由の切と認め、遼史語解の「炒伍備戰也」語解には「沙伍備臣戰名也」とありとある炒伍備を蒙古語 *Shabor* 燕北雜記に「炒離是戰」とある炒離を *shabor* の轉訛なる *shar* とする白鳥博士の所説に本づき、結局丸を以て此等蒙古語の省にして且つ訛なりと視たのである。尤も元史類編の「丸音冥、遼東君也、凡二十五部族」とあるは、羽田學士の指摘した如く、この書の原本である讀宏簡錄に「丸音杏遼東軍也、凡二十五部族」とあつて、冥は義に因る杏の譌で、君は音に因る軍の譌である。しかも丸音杏といへるは、羽田學士のいはるゝが如く、玄なごから思ひついた想像でもないやうで、箭内學士が查の譌ではなからうかと視たのは、注意するに足ると思ふ。そは印本を歸視するさしか思へるのみでなく、この字の音符をしとすることも出来るからである。こは固よ

り想像に過ぎないが、金史卷四四兵志に

東北路部族乳軍、曰迭刺部 承安三年改爲三土魯 渾尼石合節度使一 曰

唐古部 承安三年間、改爲二部 魯火札石合節度使一 二部五乳、戶五千五

百八十五

といつて居る。この部魯火札の部は都の譌なるべく、金史卷六六に迭魯苾撒乳詳穩とある迭魯苾撒と同様であらうと想ふ。予輩は此に依りて乳軍即ち石合なりと信するのであつて、「乳音沓」の沓はこゝに確に查の譌であらうと想へるのである。

黑韃事略の所謂「五十騎謂之一糾」都由切即一隊之謂とある糾を乳の譌と視るは、獨り我が箭内學士に始まつた譯でない。明治三十年即ち光緒二十三年に曹

氏元忠が宋孟瑛の蒙韃備錄に校註を施した時、已にその軍政條に「故無三士卒、悉是騎軍」とあるに註して黑韃事略を一節を引き

糾即乳軍之乳、沿三金制也

といつて居る。若しこの註が正しいとすれば宋徐夢莘の三朝北盟會編卷三に金人の官名を説いて、

其官名則以三九曜二十八宿爲號、曰三諸版孛

極烈大官人、孛極烈官人、其職曰三忒母萬戶、

萌眠千戶、毛毛可百人長、蒲里偃牌子頭、孛極

糾官也猶三中國言三總管一云

とある糾官の糾も乳の譌と視なければなるまい。

いふまでもないが諸版孛極烈は金史の諸版勃極烈

で大官人はその解であり、孛極烈官人とあるも同

様である。忒母は忒滿ともいひ、即ち萬戶長で、

萌眠は猛安で千戶長、毛毛可は猛克であり、蒲里

偃は金史兵志に「謀克之副曰蒲里衍」とある。そ

れである。牌子頭は十人の長で元蘇天爵元文類經

世大典叙錄軍制編及び元史兵志にも見わた、蒙韃

備錄に依ると、成吉思汗は舊牌子頭結縷（曹氏は

之を勃極烈と視て居る)の子であるといふ。たゞこゝに注意すべき一は黑韃事略及が蒙韃備録は元の一一般の兵制を説き、三朝北盟會編は金の一一般の兵制を説いたもので、乳軍の如き特種の軍隊に關したものでないといふことである。これは羽田學士も黑韃事略の記事につきて、既に指摘したところである。二は乳は乳に譌し易いが、之が糾に譌するには乳なる第二者の中介を経た後であるといふことである。固よりこれは不可能ではないが、乳が糾に譌する程容易でない。特に箭内學士が元史につきて舉示せられた例を見ると、概ね乳が糾に譌した例であつて糾に譌したものでない。かゝる理由を以て予輩は曹氏及び我が箭内學士が、黑韃事略の「五十人謂_三之一糾_二」の糾を、乳が糾に譌した例に依り、直に乳の譌と視たのを、やゝ早計に失したものでなからうかと想ふ。

固より予輩と雖も黑韃事略の「五十騎謂_三之一糾_二」の糾をそのまゝ糾と視るものではない。それでは著者が特にこの字に「都由切、即一隊之稱」と註せる理由を解することが出來ぬ。しかるに幸にも三朝北盟會編には、字極烈者糾_〇官也、猶_三中國言_二總管_二云_一といひ、糾_〇官は特に糾_〇の字を用ひ糾_〇の字を用ひてない。糾_〇の音符は斗である。かくてこそ黑韃事に「都由切」と註して所以であつて、この字が糾に混じ易く、若くは習見の字でないから、特にかく註したものと見ゆる。されば黑韃事略の糾は糾の譌と視なければならぬ。そして黑韃事略に依れば、元初には五十騎(十騎の誤?)を一糾といつたといふが、所謂「一隊之謂」であつて、金時には單に十騎の一隊に限らず、千騎萬騎の一隊をも糾といつたらうと想へるのは、上に引ける三朝北盟會編の文に據つて明である。予輩はこの糾を以

て、波斯人に由來し突厥人蒙古人等の間に通用せられたる Turk 即ち Tugh の音譯なりと信ずるのである。古代波斯には之を Taka と稱し、Cosmos Indicopleustes は Tujha として之を説いて居るといふ (Yule 氏註 Marco Polo 第一冊二五五頁) この Turk は犛牛尾若くば馬尾を以て作つた Standard であつて、支那の纛も亦た之れである。漢書卷一上黃屋左纛の註に「李斐曰毛羽幢也」とあり「蔡邕曰以犛牛尾爲之、如斗」とあるに視てその然るを知るべきで、西方から移入されたものと見ゆる。そは兎も角元史に烈祖の崩じ太祖のなほ幼冲なる、部衆多く離叛し、近侍脫端火兒眞亦た衆を帥ひて馳せ去るや、宣懿太后が、麾旗將兵、躬自追叛者」とある旗は即ち亮克 Turk であつて、所謂牌子頭の牌子も之から出たものであらうと想ふ。これで黑韃事略の「五十騎謂之一

糾一部由切即一隊之謂」といへるも解せらるゝ筈で、糾の糾の譌なること愈明なりといふべしである。即ち一糾は即ち一纛若くば一牌子といふと同様である。已に一纛といふと同様であるから、時の困り處に従ひ、その騎數は必ずしも一定して居ない。そこで三朝北盟會編に見ゆるが如き、「字極烈糾官也、猶中國言總管云」との解釋も出来るのである。即ち百騎も一糾、千騎も一糾、萬騎も一糾といひ得、その長には猛克猛安忒滿と稱せられたが、すべて之を糾官と汎稱せられたのである。即ち猶中國言「總管」云である。これは元時も同様であつて成吉思汗の下に九烏爾魯克 Oroluk も Turk の稱號を有し、後ちには名譽のそれとなつたといふ (同上)。

附言、纛が Turk と同語源に屬することは略ぼ疑はないが幢も亦たそうであらうと想はるゝ。即

ち巾はその物質を示し、童はその音「*ツ*」を示したのである。なほ漢書蘇の註に依ると其形「*斗*」である。斜の字もかゝる意味から製作せられたものと見ゆる。支那の字書にはこの字はあるが明瞭なる解釋がない。こゝに附記する所以である。

右に説くところにして、大体に於て幸に誤がないとすると、黑韃專略の斜を以て、直に移して乳の音を解き義を釋することは出来ぬ。何となればその斜は三朝北盟會編に依りて、斜の譌であること略ぼ明かであつて、斜なればこそ都由の切であり、「五十騎謂之斜」といへるからである。そして予輩は已に上に説いた如く、金史兵志に東北部族乳軍中迭刺部を土魯渾尼石合節度使に改め、唐古部を部(都?)魯火札石合節度使に改めて居るのを見て、乳軍は即ち石合でないかと思つて居

る。かく視ると邵遠平が續宏簡錄に於て「*乳音香*」(正しくは查)といつたのも、單に想像ではないことなるのである。

さて乳軍を石合と視て、予輩は之を拓羯の異譯に外ならざるべしと信するのである。凡て事物は突發するものでない。乳軍も契丹に突發したと視るより、何か他に由來するところがあると視るに至當と信する。そして上に已に説いた如く唐の中國に安祿山はその附近から起て、突厥・同羅・奚人を以て所謂拓羯なる軍を編成して居る。されば乳軍を石合とすると、之を拓羯の異譯と視るは相當に理由のあることと思ふ。固より羽田學士の説けるが如く、滿州語にては軍隊を *Ooha* といひ、白鳥博士は「東胡民族考」に於て Tunguse 語族の古語又た或る地方語にては、鈔合 *Ooha*, *U Kha*, *Oga*, *Oga* 等はみな軍の義を有すと説いて居る

が、此等はみな拓羯、糺軍、石合といふ軍隊の名から由來したものと視られ得られないでもないやうである。

糺軍の性質については、箭内學士が相當に精密に説明して居るが。その大體からいふと、概ね外族から募集した軍隊を謂ふやうである。こは金に於て論はないが、遼に於ては箭内學士がいはるゝ如く、必ずしも外族に限らなかつたかも知れぬ。しかも一定の部族の軍隊ではなく、何部族を問はず、否な内外族を問はず、その豪健なるものゝみを募集して編制した軍隊のやうである。特に邊防の兪戸、群牧のそれには外族が頗る多かつたやうである。遼史卷三四兵衛志の序に「天贊元年、以戸口滋繁、糺轄疏遠、分北大濃兀爲二部、立二節度以統之」といふのがある。糺は固より糺の譌であらう。遼史語解には糺轄を解して、糺軍

名、轄者管束之義」といつて居るが、糺軍の管束が疎遠とは妙でないか。こは寧ろ糺轄二字が軍名で、糺轄疎遠とは糺轄即ち糺軍が族類の上から疎遠であるとの義ではなからうか。そして「北大濃兀」の大濃兀は明瞭ではないが金の撻魯古と同じく、今の洮兒河沿に遊牧した部族であらうと想ふ。何となれば濃と魯とは往々相混せらるるからである。そしてこは蒙古人などの雜種であらうと想へるが、實際糺轄疎遠などいふから視て、所謂糺軍には外族から募集したものゝ多かつたらうといふ感を一層強めるのである。なほ金時の事ではあるが、金史卷四内族襄傳に、諸糺を内地に移すや、或曰糺人與北俗無異、今置内地或生變如何、襄笑曰、糺雖雜類亦我之邊民云云と見え、蒙古人に近い雜類であつて且つ邊民であつたといふことが知らるのである。されば糺軍は

その性質に於ても亦た極めて拓羯に似て居るではないか。

予輩は乳轄を以て、即ち乳軍、即ち拓羯の異字あると以爲ふのであるが、この乳轄は遼初から既にあつたのであつて、これにつき遼史に奇妙なることがある。それは遼史の國語解は史本文の順序に従つて文字排列せるにも拘らず、之れを帝紀太祖紀のうち、嗚娘改、西樓、阿點夷离的の後、夷离畢の前へに置いてあることである。本文を検すると嗚娘改は太祖神冊三年の條に見え、西樓は同六年の條に見えて居るが、その間にも、その後にも本紀中には乳轄につきて何等の記載もなく、却てさきに引いた如く兵衛志にのみ見えて居るのである。尤も予輩が藏せる遼史は南監補修本であつて、この邊は嘉靖八年の補刻である。元刊には神冊六年の條西樓の後夷离畢の前に乳轄に關する記

事があるか否かを知らぬが、これはあつた筈であらうと想ふ。この六年は太祖と諸弟刺曷等との間に戦争があつた年で、遼史卷七三耶律曷魯傳に(前)明日(太祖)即皇帝位、命曷魯總軍國事、時制度未講、國用未充、扈從未備、而諸弟刺曷等、往往覲非望、太祖宮行營、始置腹心部、選諸部豪健二千餘充之、以曷魯及肅敵魯總焉、已而諸弟之亂作、太祖命曷魯總領軍事、討平之、以功爲迭刺部夷离堦と見えて居て、この「諸部豪健二千餘」が即ち乳轄ではなからうか。こは想像であるが太祖六年に既に乳轄といふのがあつたといふことは略ぼ疑はれぬ。元來遼は回鶻に服屬して居たからその間に親密なる關係があつて太祖淳欽皇后の如き、その先は回鶻人だといひ、遼史卷七一后妃列傳にも遼因突厥稱皇后曰可敦といつて居る。こゝに西方拓羯の軍名及び軍制が

傳つたと視ても何等の不可思議はない筈である。況んや安祿山が既に突厥・同羅・奚人などを以て拓羯といふ軍隊を編制したに於てをやである。

なほ蒙韃備録に諸將功臣を説いて

上
畧 又其次、曰大葛相公、乃紀家人、見留守
燕京

といつて居る、曹氏は之に註して

接大葛即撒曷對音、古今紀要逸編云、嘉定五年十一月、忒沒眞留_二大會撒曷圍_二女眞於燕京_一而身督_二三道兵_一分_二取河東河北山東三路九

十餘郡_一與_二此錄_一合、知_二大葛即撒曷之對音_一、撒曷又即石抹之對音、故元李志常長春真人西遊記、稱_二石抹相公_一、即石抹也、先也

明安の長子の石抹咸得不である。元史卷一五〇石抹明安傳に據ると、太祖十年、西紀一二二五に元兵の燕京を降すや、明安は功を以て太傅邵國公を加へられ、蒙古漢軍兵馬都元帥を兼管したが、翌年疾を以て燕城に卒し、長子咸得不が、その職を襲ぎ燕京行省となつたといふ。又同卷一四六耶律楚材傳に據ると「帝自經營西土、未暇定制、州郡長吏、生殺任情、……燕薊留後長官石抹咸得不、尤貪暴、殺_レ人盈_レ市、楚材聞_レ之泣下、即入奏、請禁_二州郡、非_レ奉_二璽書_一、不得_二擅徵發_一、因當_二大辟_一者、必待報、違者罪死、於_レ是貪暴之風稍戢」とある。これは太祖二十一年(西紀一二二六)以後の事である。されば石抹咸得不は太祖十一年(西紀一二一六)から少なくとも同二十一年(西紀一二二六)までは燕京行省即ち燕薊留後であつたことが知れるのである。そして長春真人が燕京に入つた年は

太祖十五年（西紀一二二〇）であれば、西遊記に「行省石抹公、館師於玉虛觀」といへる行省石抹公の石抹威得なることは言ふまでもなからう。これは錢大昕の西遊記末尾にも見えて居て明白なる事實である。又た蒙韃備錄には、去年春、珙每見其所行文字、猶曰「大朝」又稱「年號」、曰「免兒年龍兒年」、自「去年」方改曰「庚辰年」、今曰「辛巳年」、是也」とあれば此書が辛巳即ち宋嘉定十四年（西紀一二二一）に出來たこと固より疑ない。そして「大葛相公乃紀家人、見現「留守燕京」といへば所謂相公の石抹威得不なること固より疑ひはなからう。たゞ曹氏が宋黃震の古今紀要逸編に「嘉定五年十一月感沒眞留大會撒曷圍女眞於燕京、而身督三道兵、分取河東河北山東三路九十餘郡」とあるを引きて「與此錄合」といへるは何の謂たるを知らない。これと本文とは略ぼ交渉がないのである。

る。況んや此紀要逸編の紀事にはやゝ傳聞の誤があるに於てをやである。太祖が三道進兵して九十餘城を取つたのはその八年即ち宋の嘉定六年であつて五年でない。（尤も宋人の間にはかゝる所傳があつたやうだが）。この時燕京の金兵を牽制する任に當つたのは、元史に依ると可忒薄剌であつて、親征錄に怯台薄察に作つて居るのがそれである。そして眞に女眞を燕京に圍んだのはその翌年（即ち太祖九年）で元史には「詔三摸合・石抹明安與斫荅等圍中都」といつて居る。また柯氏劭窓の新元史に據ると、「是年始置行省於宣平、以撒木合領之、部署降衆」と見えて居る。撒木合は即ち三摸合である。こゝで紀要逸編の撒曷は可忒薄剌であるか、三摸合であるか、石抹明安であるか、或はその他であるか、談は實際曹氏のいへるが如く容易でないのである。

たゞこゝに注意すべきは、石抹威得不を備録に大葛といひ、且つ之を家紀人といつてあることである。備録は孟珙が實際見聞したところのものを書いたので、いふまでもなく充分信用が置けるのである。元史卷一五〇石抹明安傳に據ると、石抹明安桓州の人である。もと金に事へて屢蒙古に往來し、太祖を識つて居たといふことであるが、太祖の五年に遂に元に降つたのである。金に在つて桓州は西京路に屬し、故城今の察哈爾多倫縣に在りといふ。そしてその姓石抹が示すが如く、遼の

后家と同族若くばその關係者で、血統を回鶻に引いて居るらしい。曹氏は「知^三大葛即撒曷之對音、撒曷又即石抹之對音」といつて居るが、大葛は殆ど撒曷の訛轉であらうが、撒曷は石抹と音の上に關係はなからうと思ふ。たゞ石抹明安の生地より視、その血統より視、その經歷より視、且つその

子威得不が紀家人と傳へられたるより視て、そが糺軍に寓する人であり、紀家は殆ど糺軍の訛轉であらうと思ふ(Saki, Chaki, Taka)。時處若くば種族に因りてかゝる音の訛轉は Chashkent が Shashkent となり、それがまた Tashkent となつたのに於て、その適切なる一例を見ることが出來やう。従つて大葛は *Shashkent* の訛轉と視られ得べく、そが *Shash* 人なるが故に大葛と呼ばれ、別に威得不といふ實名があるのに氣付かなかつたものと見ゆる。

予輩はこの事に關して不思議の感に打たるゝものが更に一つ残つて居る。それは石抹なる姓である。耶律が劉となり、述律が蕭となつたといふことに畧稱と視て何等の不思議もない。しかも述律が石抹となつたといふは、固より音の訛轉といふことは出來ぬ。何となれば律が抹に轉訛すべき理由が

ないからである。元史卷一五〇石抹也先傳に「前略至遼爲述律、號稱后族、遼亡、改述律氏爲石抹氏」といひ、元許謙白雲集卷二總管黑軍石抹公行狀に前略故世后皆蕭氏、而蕭遂爲右族、金滅契丹、易蕭爲石抹氏」といへるも、たゞ金に至りて述律即ち蕭氏が石抹となつたとするのみで、何故に石抹といつたかといふ理由に至つては依然不明である。予輩は或は牽強の嫌があるかも知れぬが、これは虜軍即ち Sika の姓 Sama (Sam) から來て居て、石抹は即ち Sama (Sam) の音譯ではないかと想ふ。しかも固より現在に於て之を確信する氣はない。

最後に予輩はこの小論文を草するに當り、痛く材料の不足に苦められ、先輩諸氏の好意により幾多の便宜を得たが、なほ Ferdousy の Shih-Namén の如き、Mohi 氏の佛譯々 Warner 氏の

英譯も、終に寓目するの機會を得ず、僅に Gouin 氏の波斯史に見ゆるその摘要に満足せざるを得なかつたことを、こゝに告白して、感謝と共に遺憾の意を表する。

附言 支那に所謂西遼は、西方亞細亞に於いて Kara Kh-tai を稱せられた。こゝは Betsch-oider 氏のいはれし如く、蒙古若くば突厥から起つたものであらう。何となれば Kara はこの兩國語に於て均しく「黒」の義を有するからである。(Medieval Researches 第一冊二一〇頁)。たゞこの契丹が黒契丹と稱せらるゝに至りし所以に關しては、氏を始め從來の學者に明解がないやうである。特に氏の如きは蒙古の古史にこの人民がこの語の複數 Karakitat として記載せられしを説き、何が故に彼等が黒契丹と稱せられしか不明であるといつて居る。予輩は元史石抹

明安傳に據つて幾分かこの問題の解決に端緒を得たやうな心地がする。石抹氏は遼の後族である。也先の祖庫烈兒は「誓不_レ食_ニ金祿_ニ率_ニ部族_一遠徙」といはれて居る。その父脫羅畢察兒も亦た仕へなかつた。也先は「年十歳、從_ニ其父_一、問_ニ宗國之所_一以亡、即大憤曰、兒能復_レ之」と傳へられて居る。そしてそが元の大祖に事へ、金を攻めて功を立てた後傳には「也先籍_ニ其私養敢死之士_一萬二千人、號_ニ黑軍_一者、上_ニ于朝_一進_ニ上將軍_一、以_ニ御史大夫_一提_ニ控諸路元帥府事_一云云」といつて居る。されば也先の私養せる敢死の軍士を當時黑軍と號して居たのである。遼の恢復を圖る耶律大石の國を黑契丹と稱したのと相似たものがあるではないか。この黑軍は也先の死後、その子查列之を領し、木華黎に従つて關西諸郡を下し、汴京の南征には詔して前列たらしめた。

また遼東の南京を攻めし時にも殊功があつた。查列の死後はその子庫祿滿が之を領し、庫祿滿の死後はその子良輔が之を領したといふ。原來この黑軍は遼の讎を金に復するから起つたので、いはゞ復讐の軍である、従つてその旗幟等は黒色を用ひたものゝやうで、これが黑軍といふ名の起つた、原因であらうと想ふ。そして同一の事情に在つた西遼も、同一の状態ではなかつたらうか、少くとも耶律大石直屬の軍隊は亡國の遺臣として旗幟その他に黒色を用ひて居たらうと思ふ。しかもそれが時を經るに従ひ、慣例となり、なほ支那本土に於ける黑軍と同様のものになつたのではなからうか。そしてこれが黑契丹の名の起つた原因ではなからうか。なほ大方の示教を蒙らば幸である。

(六月二十五日)